市販鶏肉から分離されたサルモネラの血清型および薬剤感受性

福井県衛生環境研究センター　○山崎史子、石畝　史、村岡　道夫

１．　はじめに

食の安全への関心が高い近年、動物用抗生物質の使用による薬剤耐性菌の出現と、その食肉汚染が危惧されている。そこで県内に流通する市販鶏肉におけるサルモネラの汚染実態調査を行い、分離菌株について薬剤感受性試験を実施し、薬剤耐性菌の出現状況を調査した。

２．　材料および方法

2007 年４月から 10 月に福井市内の 6 店舗で購入した国内産 48 検体および外国産 16 検体、合計 64 検体を用いた。培養法は 3 方法で実施した。すなわち、前増菌培地、増菌培地および分離培地の順に示すと、①EEM→SC→MLCB およびクロモアガーサルモネラ（以下、クロモ）、②BPW→RV→SS およびクロモ、③BPW→TT→SS およびクロモ。分離株については血清型別試験および薬剤感受性試験を実施した。使用した薬剤はアンピシリン（ABPC）、ストレプトマイシン（SM）、テトラサイクリン（TC）、シプロフロキサシン（CPFX）、カナマイシン（KM）、セフォタキシム（CTX）、クロラムフェニコール（CP）、ST 合剤（SXT）、スルフィソキサゾール（Su）、ゲンタマイシン（GM）、ナリジクス酸（NA）およびホスホマシシン（FOM）の 12 剤とした。

３．　結果および考察

64 検体中 41 検体（64.0%）からサルモネラ 584 株が検出された。国内産では 48 検体中 38 検体（79.2%）および外国産では 16 検体中 3 検体（18.8%）で検出された。国内産はすべてチルド製品で、外国産は冷凍あるいは解凍したものであり、今回の調査では国内産チルド鶏肉でサルモネラ汚染が高率であることが示唆された。

分離されたサルモネラ 584 株のうち 217 株の血清型別を実施したところ、*S.* Infantis が 117 株（53.9%）、*S.* Schwarzengrund が 63 株（29.0%）、*S.* Manhattan が 14 株（6.5%）およびその他が 23 株（10.5%）であった。他の調査でも鶏肉から分離された血清型は *S.* Infantis が優位であり、今回の調査と一致した。

血清型が判明した 217 株のうち 65 株を薬剤感受性試験に供試したところ 62 株（95.4%）が何れかの薬剤に耐性を示した。*S.* Infantis では 36 株中 27 株（75.0%）、*S.* Schwarzengrund では 16 株中 11 株（68.8%）が 4 剤以上に耐性を示し、多剤耐性株に鶏肉が汚染されていることが確認された。また薬剤別に耐性率をみると、TC、SM、Su の順に 87.7%、80.0%、78.5%と耐性率が高く、これらは抗生物質動物用医薬品の中で（2001 年）、鶏における販売量が他の家畜に比べ多い薬剤であった。